

( 続紙 1 )

|   |  |    |      |
|---|--|----|------|
| 京都大学  | 博士 (地域研究)                                | 氏名 | 中村友香 |
| 論文題目  | ネパールにおける近代医療と病いの経験<br>—糖尿病患者の民族誌的研究を通して— |    |      |
| (論文内容の要旨)   |  |    |      |
| <p>本論文は、ネパールにおける近代医療と糖尿病患者の経験についての研究である。ネパールでは近年、疾病構造の変化に伴い糖尿病などの非感染性慢性疾患の増加が指摘されている。糖尿病はこうした疾病の中でも特に重要性の認知度が高く、糖尿病を対象とした専門クリニックなどが設立される状況にある。一方で、近代医療施設における医療費の高騰や誤診などの医療ミスなどが報道され、医師が体現するような近代医療的知識や権威に対する疑惑と不満が生じており、近代医療と人々の関わりは期待と疑惑の中で複雑化している。</p> <p>本論文の目的は、ネパールにおいて糖尿病がいかなる社会関係の中で経験されているのか、そしてその病いの経験や社会関係の在り様がどのように医療現場の実践をかたちづくっており、いかなる特徴をもった近代医療を生成しているのかを明らかにすることである。序章では、これらの問いに対する本論文の視点を示す。まず、近代医療はそれ自体が地域的文脈の中で社会関係をふくむ異種混濁の要素を含みこみながら生成されるものであると捉える。次に、糖尿病に関わる自己の在り方や責任の問題に着目する。そして、本論文では医療人類学において主流である「病いの語り」だけでなく、必ずしもプロットのあるナラティブを伴わない、身体を介した経験の共有に関する議論を参照しながら、病者の経験に迫るという方向性を示す。</p> <p>第1章では、ネパールにおける近代医療に関する政府、国際ドナー、宣教団等による資料を中心に用い、その歴史的・制度的な展開について整理している。そこではネパールの近代医療について、植民地政府の影響も少なく、国家政策としての保健・福祉サービスが安定的に供給されることのないまま、新自由主義的な状況の中で急速に、大きな格差を孕みながら展開してきたことを示す。</p> <p>さらに第2章では、近代医療施設における患者と医療従事者の現状を、地方都市であるT市を事例に明らかにしている。患者たちが近代医療サービスを経験し選び取る中で、制度的・社会的・経済的障壁に遭遇し、「いい医療」「いい医者」を求めて移動していく様子を記述する。同時に、医療従事者に対する患者の疑惑や不満の背景には病院や医療制度の孕む構造的な問題があることを、医療従事者側の葛藤に着目しながら指摘する。</p> <p>さらに第3章以降は、よりミクロな視点から糖尿病患者の認識、経験や日常生活に焦点を当てる。第3章では、患者たちによる、糖尿病やそれにかかわる食べ物、薬につい</p> |  |    |      |

での解釈を明らかにする。ここでは、近代医療的な要素と非近代医療的な要素の双方を含みこみながら、身体に根差した経験に基づいた形で糖尿病の認識が作り上げられていることを示している。

第4章では、T市の複数の糖尿病患者たちの日常生活における会話と相互行為の記述を通じて、糖尿病の経験とそれを取り巻く社会関係の在り方に接近する。糖尿病は日常生活の出来事や、人やものとの具体的な関わり合いの中で時折思い出されるものとして経験されていた。さらに、日常生活の中で糖尿病は、一人称の物語として記憶され、語られるというよりも、家族や身近な人々との間でこそ明示的に記憶され、語りなおされ、その経験が共有されていた。日常生活の会話においては、糖尿病に関わる／関わらない多様な出来事が繰り返し語られており、患者の「今—ここ—私」に関わる現実を他者が代わりに感じたり、経験したりできるような関係が創出されていた。そこでの関係性は、病いと身体に関わる不確かさや偶発性に孤独に向き合うのではなく、共同性のなかで対峙したり、やり過ごすことを可能にするものでもあった。

第5章では、首都カトマンドゥの内分泌科専門センターにおける診療現場の観察と、医療スタッフへのインタビュー調査をもとに記述がなされる。そして、医師や看護師を日常的な社会関係に巻き込もうとする患者や同伴者の働きかけと、医療従事者らの反応について考察している。患者とその同伴者たちは、診察室において期待されるような受け答えはほとんどせず、むしろ医師や看護師に対しても、病いをめぐる日常的な関係構築の様式（第4章）に則ってその経験の共有を求めている。医師らはそれに対して「あるべき医師」としての態度を順守しようとするが、彼らの意志や意図によらず、患者らの求める関係性へと取り込まれそうになっていく様が描かれる。

終章では、ネパールにおける糖尿病の病いの経験とその共有には、病者が語りによって自らの経験に意味を付与し、これを他者が共有する方法というよりも、会話すること自体や、間身体的関係に基づく経験の共有が重要である可能性が示される。さらに、身体と疾病に対する中動的な態度が、ごく普通の日常生活の中で立ち現れており、それが糖尿病の不確かさと偶発性に対峙することを可能にする土壌となっていると論じる。そして最後にそうした社会関係的な要素が重要な位置を占めながら、ネパールにおける近代医療が生成されていると指摘する。